

## 『学会開催報告』

第19回日本乳癌画像研究会セミナー  
19th Seminar of Japanese Society of  
Breast Cancer Imaging

医薬保健研究域保健学系

川 島 博 子

医薬保健学域医学系がん局所制御学分野

井 口 雅 史

第19回日本乳癌画像研究会セミナーは、平成22年9月25日(土)に、金沢大学附属病院乳腺科、金沢大学医薬保健研究域保健学系の川島博子准教授を当番世話人として、また、金沢大学医薬保健学域医学系がん局所制御学分野の井口雅史を実行委員長として、金沢駅前のホテル金沢にて開催された。

本セミナーは毎年2月に開催される日本乳癌画像研究会に並行して毎年秋に開催されている。テーマを1つにし、活発な議論を展開する場であり、乳癌診療に携わる医師のみならず、コメディカルの参加が多いことも特徴である。今回のセミナーでは「画像、病理からみたトリプルネガティブ乳癌」という難しいテーマを掲げ、第一線で活躍中の5名の先生を招きご講演をいただいた。

聖路加国際病院放射線科の角田博子先生には「トリプルネガティブ乳癌のマンモグラフィと超音波画像」、静岡県立静岡がんセンターの植松孝悦先生には「トリプルネガティブ乳癌のMRI所見」と題して講演をいただいた。トリプルネガティブ乳癌の画像所見の特徴が明らかにされるとともに、角田博子先生の、トリプルネガティブ非浸潤癌はトリプルネガティブ浸潤癌のprecursorではないのかもしれない、という仮説に興味深く拝聴した。

プレストピアなんば病院放射線科の中原 浩先生には、「トリプルネガティブ乳癌の術前化学療法の効果判定」、聖路加国際病院乳腺外科の矢形 寛先生には、「トリプルネガティブ乳癌の治療戦略」と題し、まさに臨床に直結した有意義な講演をいただいた。治療に難渋することの多いトリプルネガティブ乳癌では治療方針の決定、変更画像診断の果たす役割は大きく、迅速かつ正確な画像診断は患者の予後に直結するといっても過言ではない。

矢形 寛先生は、治療中は慎重な経過観察が必要で、無効な場合はタイミングを逸することなく治療方針の変更を行うべきと強調された。

最後の特別講演では、癌研究会癌研究所病理部の秋山太先生より、「病理からみたトリプルネガティブ乳癌」と題し講演をいただいた。秋山先生は、トリプルネガティブ乳癌の病理診断にはいろいろな問題点があり、まず免疫染色の精度管理が重要だと強調された。乳腺病理の第一人者の講演に会場は聴き入り、講演後の討議でも地元の病理医から多数の質問が寄せられた。

今回はコメディカルには少々難しすぎるテーマであったと反省している。まさに研究途上の話題のため、会終了後の懇親の場でも、演者の先生方から話をまとめるのが大変だったとの感想をいただいた。しかし一方では、旬のテーマについてまとまって聴けてよかったと言葉もいただき、難しいテーマにあえて取り組んでよかったかなと思っている。

最後に、今回のセミナーの開催にあたり、金沢大学十全医学会、金沢大学消化器・乳腺・移植再生外科のスタッフをはじめ、多くの方々にご支援をいただいた。皆様には心よりお礼を申し上げる。

